**『観光客は地域に何を求めているか』**

◇人文資源

・情報の解説や案内人が欲しい→観光ガイドの養成

・固有の体験がしてみたい→参加体験メニューの設定

・地域文化が感じられるものが欲しい→固有の地域資源の発掘

・地元の人とのふれあいが欲しい→交流の場の設定

・祭り（歳時記)、イベントが大好き→賑わいづくり

◇郷土味覚・料理

・原材料は地場のものを使って欲しい→地産地消

・伝統的味覚を活かして欲しい→地域固有の味

・地元民と郷土料理の体験がしたい→地元民とのふれあい演出

・手作りの味が欲しい→地元民の真心の提供

・料理の原材料の説明が欲しい→地域特性の説明

◇ふるさと産品

・地場産品の地元直売所が欲しい→特産品直売所の設置

・手作りで地場の本物を手に入れたい→偽物提供は厳禁

・地域伝統をかんじさせたものが欲しい→産品開発品にも伝統手法

・製造元の見学や体験がしてみたい→産業観光への関心

・生産の由来、保存法、調理法など明記して欲しい→産品情報の提供

・イメージがよく一級品に手が出る→地域イメージ戦略の構築

◇観光旅行先を決定する際に参考とする情報（日本観光協会「観光の実態と志向」19 年度）

1 位　家族、友人の話（38.0%）

2 位　インターネットからの情報（35.8%）

3 位　パンフレット（34.0%）

4 位　ガイドブック（32.8%）

5 位　旅行専門雑誌（31.9%）

※近年 Web サイトの利用者増加傾向

○　意見交換等について

**森を考える会会長**：　地域おこしということで長年取り組んでいるが、お年寄りから子どもまで全員が参加するという機運が欠けている。全員が参加して皆で力合わせてやろうという機運が高まらないと前に進まないということをつくづく感じさせられた。この機会に地域でまず小さいことから輪を広げ進めていきたいと思う。

**森を考える会役員**：　日韓文化交流事業なら飯高の方へ来ていただけるのではないかと思うが、日韓交流事業とはどのようなものか。

**アドバイザー**：　日韓の文化交流を進めるということで外務省の予算で動いており、主に学生を対象にした交流活動である。毎年行っており、田舎へ連れて行くというのは今年初めてのことであった。受け入れの対応、おもてなしの体制が出来るかどうかがポイントとなる。やり方によっては森地区でも出来そうな感じはする。

**波瀬むらづくり協議会会長**：　休校中の波瀬小学校跡の利用として体験学習を計画しているが、事例紹介は地域の体験学習であったが小中学校への体験学習等の事例はどうか。

**アドバイザー**：　今まではなかったが、これからは出てくると思う。波瀬小学校は活用できると思った。宿泊はできるのか。

**波瀬むらづくり協議会会長**：　宿泊が出来ないので、スメール、山林舎の宿泊施設に格安で宿泊できるよう交渉している。今年から本格的に活用していきたいと思っている。

**アドバイザー**：　規制が厳しいと利用の幅が狭まる。宿泊できないことがネックだと思う。

**森を考える会会長**：　ダムの水源については、地元にいる者が山の手入れなどに関わっていかないと水源は守れない。そういう観点から下流域の人にこの地域のことを知ってもらおうということで、木場公園を交流の拠点としていきたい。池、トイレなどの施設を作ってきたが、木場公園を活用しながら成功させたいというのが地域の願いである。今後、人を呼び込んでいくにはどのような活用、どのように進めるのが一番良いのかということをお聞かせ願いたい。

**アドバイザー**：　木場公園は、森地区の活性化の拠点になると思っている。木場公園を拠点にしながら、どういう拡がりをもった展開が出来るかということを考える必要があろう。また、シカ肉についてだが燻製が出来ないだろうか。東京都の奥多摩地方で卒塔婆を作っている会社が、地区の酪農家と提携して塔婆の破片をチップ状にして燻製チーズをつくり出したところ大評判となっている。こちらに置き換えれば、流木でどういう香りのものが出来るのか分からないが、シカ肉の燻製づくりに挑戦してみてはどうか。加工品であり日持ちするから、飯高の駅でも販売できると思う。

　**また、**イベントというのは催し物を楽しむだけではなく、実験の場と考えることが重要である。イベント会場で，今後取り組んでみたいという課題があれば、それを実験してみることが重要である。たとえば、開発したい食品があるなら、試作品を試食させて、どういう反応が来るか。それによって改造したりしてより良い製品に工夫をしていく。そういう実験の場としてイベントを活用していくことが重要である。ぜひ、そうした考え方でイベントを活用してほしい。

**ダム管理所長**：　出来るものはあると思う。竹の使い方を考えると、笹竹であればカミデッポウ、竹とんぼも作り方教室からはじめることをやれば人は集まる。竹というのはいろんな使い道がある。この地域はアマゴもあるが夏場であれば、川には鮎がわんさかいる。竹飯で鮎を炊いたり、アマゴを炊いたり、山野草を炊いてもいいじゃないか。結構なメニューができると思う。燻製という話もあるだろう。人が来る方法としては、何か面白い食べ物があること。美味しい食い物があること。そうするとついつい行きたくなるのが人情である。食い物の発想というのは価値があると思っている。プラスアルファの魅力付けとして何が出来るのか。その繰り返しの中でイベントをぶち上げＰＲする。拠点がいくつかあるが、拠点をうまく結ぶようなネットワークをつくってやれば１泊２日か、１日コースになると思う。ダム湖の使い勝手という話は、使いやすさから言えば抜群である。旧道が残っており、それを使えばすぐに水に入れるという条件になる。欠点は平場が無いこと、もう一つの欠点は水そのものは良いが、赤潮が毎年上流端で発生する。一番利用しやすい上流端のところに赤潮が発生するのが欠点である。ダム湖等の利用を許可する段階で一番の

問題は管理体制ということになる。これは組織としてきちっとした管理体制が出来るところしか許可は与えることができない。相当厳しいものですが、使うのだったら使えない訳ではない。

**アドバイザー**：　きちっとした体制づくりを含め、地元がどれだけ本気度があるかということである。体制づくりが出来るのであれば可能性として開けてくる気がする。

**森を考える会会長**：　地域は獣害で困っている。それを逆に利用したシカ料理とかイノシシの料理などで人を呼び込むことが出来たら良いと思う。食肉として販売するには、整備された施設等が必要であり三重県の方でも検討してもらっている。シカ料理としては「しぐれ煮」は出していたことがあった。きちっとした処理場がないとルートが出来ないということで、処理場を作ってほしいと要望している。それが出来ると、食材として美味しい食べ方もある。又、地域食材としてアマゴをメインにした取り組みをし、増産体制を取ってどんどん売れたら良いと思っている。木場公園の取り組みが一番大切な時期である。人を呼び込んでやるからにはボランティアや資金の持ち出しでは続かないので、手間賃ぐらいになればと思っている。その辺が一番の課題であり、是非そういうお知恵をお借りしたい。

**アドバイザー**：　来年のイベントで、例えば他の事例でお話ししたように、竹飯なども実験してみるということが重要であると思うので、是非やってみてはどうか。

**森を考える会会長**：　木場公園にはバーベキューをする施設はないが、テントを張ったり、工夫して紹介のあった竹飯やそのようなものを一度試すというのも面白い。

**川俣地区住民協議会会長**：　学校統合で川俣小学校が休校中となり、これを利用した地域おこしが出来ないかということで、芋まつりをメインに郷土の偉人製茶王大谷嘉兵衛のイベントを開催したが、他に学校利用で良い利用方法はないか。

**アドバイザー**：　休校は廃校と違っていろんな制約があり、自由にならないため活用は難しい。事例紹介でキッズ観光ガイドの話をしたが、当初は学校教育関係者から猛反対があった。元校長先生が、「私が責任を持って、学校とは別の形でやります。」ということでようやく実現した。色んな規制が掛かって何にも出来ないというケースが多いから、そこをどう乗り越えて行くか。知恵を絞って情熱をもってやることが必要である。

**宮前地区まちづくり協議会会長**：　道の駅の運営は安定してきたが、これから持続していくにはどのようにしていくかということと、事業としてやっていくときには、経費等をシビアに考えていかなくてはならない。又、客離れをどう防いでいくかという観点から、和歌山街道が山の中を通っていたことから原形を残しており、歴史街道として珍布峠を売り込む方法、集客する方法が何かないか考えているところである。

**アドバイザー**：　飯高道の駅は宮前地区のキーポイントになる。森地区であれば木場公園がキーポイントになる。その辺を繋げて連携する仕掛けをつくる。連携したコースづくりをしていけば、木場公園も道の駅の活性化にも役立つのではないか。とにかく、地域のもつ特徴を出してということだと思う。静岡県富士市にある日本で２番目に売り上げが多い道の駅「富士川楽座」というのがあるが、ここでは今、茶葉のてんぷらを載せた天丼が注目されている。まさに地元らしい特産品の活用であり、これこそ地域の持っているものを活かすということだと思う。

**宮前地区まちづくり協議会会長**：　道の駅でもレストランを経営しているが、当初懐石風の

ものを出していたが食材等に経費がかかった。地元の主婦が免許を取り、地元食材のコンニャクを使った料理など田舎主婦料理に方向転換したら良い結果が出てきた。

**アドバイザー**：　その地域らしいということが重要です。地域らしさをどのように出せるかに挑戦し、実験で感触をつかんだら定着化させていくことがポイントである。また、イベントにしても、イベントの楽しさのことばかり考えるのではなく、イベントをコアとした地域資源活用の散策コースをどのようにつくるか、を考えるのも重要。そうすると、イベント以外のときも散策コースは活きてくる。例えば黒瀧神社をスタート地点として、ガイドさんが周辺を案内すれば楽しい散策ツアーが出来そうな気がする。黒瀧神社の境内にある夫婦杉にしても、案内板は観光的に見てあまり面白くない。案内板ももっと夫婦杉に興味を持たせるようなドラマチックな表現で書く必要があると思われる。

◆２日目

日　　時：　平成２２年１２月１８日（土）

視察場所：　森地区（津本公園、木場公園、黒瀧神社）宮前地区（珍布峠、道の駅）

出 席 者：　二瓶長記アドバイザー

【松阪市】

中西士典（飯高地域振興局次長）、内田寿明（地域振興課主幹）

【国土交通省】

古谷健蔵（国土交通省　水源地域対策課課長補佐）

早川信光（国土交通省　蓮ダム管理所長）

（木場公園の炭焼き窯）

（木場公園の炭焼き窯）

（宮前地区　ウォーキングコース珍布峠）

（宮前地区　道の駅「飯高駅」）

（３）第３回派遣

◆１日目

日　　時：　平成２３年２月１４日（月）

会議場所：　松阪市飯高地域振興局森出張所　２階会議室

内　　容：　アドバイザーからの提言

出 席 者：　二瓶長記アドバイザー

【住民団体】

森を考える会、波瀬むらづくり協議会、川俣地区住民協議会、宮前地区まちづくり協議会

【松阪市】

中西士典（飯高地域振興局次長）、寺脇充　（地域整備課長）、福山雅文（地域振興課長）、内田寿明（地域振興課主幹）、小池洋子（森出張所長）

【三重県】

近藤和也（土地資源室主幹）

【国土交通省】

田作光良（国土交通省　水源地域対策課　計画係長）

早川信光（国土交通省　蓮ダム管理所長）

議　　題：　アドバイザーからの提言について

意見交換等について

会議内容

○　アドバイザーからの提言について

『アドバイザーからの提言』

**◇振興の基本的方向性**

１　観光交流人口の拡大化

地域の定住人口を増やすのは困難であり、他所から訪れる人をどのように増やし、経済効果を生み出す手立ては出来ないかと考えたときに、上下流域交流を含む観光交流人口の拡大への取り組みがポイントになる。

２　地域力の向上

地域力を付けていくには、連帯意識が必要不可欠である。組織には沢山の人はいるが、実際行動する人間は限られている現状がある。このことから活動する人間を増やし、連帯意識の強化による地域力の向上がポイントになる。

３　持続的経済活動

一過性の経済活性化でなくて持続的な形で、雇用を伴った経済活動がポイントになる。

**◇サポート人口の拡大**

都市住民との観光交流を通じて、地域のもつ「光」を全国に向けて発信していく必要がある。

人、もの、情報の交流で、地域のファンの拡大を図る。地域を訪れる観光客の拡大。特産品を定期購入する顧客の拡大、コミュニケーション人口の拡大、地域をＰＲしてくれる支援者の拡大、インターネットでの交信者の拡大など。

**◇地域イベントの戦略**

１　イベントを成功に導くポイント

参加性：　来たお客さんが「来てよかった。試してみてよかった。」という参加性を組み入れていく。

教養性：　このイベントにふれた事により「少し利口になった。自分づくりに役立った。」という教養性を組み入れていく。

発見性：　毎年同じことをしていると発見性がなくなる場合がある。その年によって新しい試みをイベントを通して行っていく必要がある。「新しい発見がありました。地域に対する認識が変わりました。」という発見性を組み入れていく。

娯楽性：　イベントであれば「本当に楽しかった。時間が瞬く間に過ぎた。」娯楽性に富んでいなくてはならい。

共感性：　「胸にジーンときた。感動に涙がこぼれた。」など現在のイベントにこのような仕掛けがあるか検討してみる必要がある。

連帯性：　「皆の力が結集できた。仲間がたくさんできた。」など現在のイベントに仕掛けがどれだけできているか検討してみる必要がある。

２　地域イベントの構成

コンセプトを明確に表現し、イベント全体の中核となる「コアイベント」が必要となる。核にはならないが、コアイベントと同質で付帯する「サブイベント」、それだけでは集客できないので、観客動員に効果のある人気のイベント「トレンディイベント」、３つの要素から成り立っている。今のイベント内容が３つの要素のどの範疇に入るのかを検討する必要がある。

３　イベント展開における起承転結

個々の催しを単に羅列するのでなく、上手く流れを演出し、組み合わせることによって観客は感動して帰ることができる。特にクライマックスをどこに持ってくるかを検討する必要がある。

**◇イベント改革の方向性**

・既存イベントの位置づけの明確化

既存イベント内容の位置づけ（コアイベント・サブイベント・トレンディイベント）を明確化し、コアイベントの演出趣向と発信の強化に努める。

・起承転結のストーリー化

全体構成の展開の流れを重視し、イベント成功のポイントに留意する。

・魅力ある暮らし（食文化）の提案

石焼しいたけ・石焼バーベキュー（シカ肉等）などの提供や竹の利活用として「竹飯（アマゴ入り炊込みご飯）」と竹の器での提供をするなど。

・農林産物の無人販売巡りツアー

イベント会場を出発・終着点として地域内の農林産物無人販売所巡りをスタンプラリーと連動して実施する。

・山野草摘み草ツアー

豊かな自然を活かして摘み草ウォーキングと山野草料理を食べる。イベントとの連動で実証実験し、将来における定着化への布石とする。

・山野草食い処の開設

ヘルスツーリズムの時代に対応し、地元老人会とのタイアップによる摘み草の食事処の開設を視野に入れた食体験を設ける。

・マタギ料理の開発

獣害となっているシカ、イノシシの食活用によるマタギ料理を開発し、提供する。併せてマタギ料理クッキングセットの販売も検討する。

・ウッドカヌーの試乗会

森林とともに生きてきた地域の特性と、ダム湖という二つの特性を最大限活かしたレジャー産業にウッドカヌーがあげられるが、そのウッドカヌーをダム湖（奥香肌湖）に浮かべ、試乗会を開く。これは、将来、地域に木材利用のカヌー工房の設立を視野に入れた新たな展開としても注目を浴びる。

・森の案内人（自然体験指導者）の養成

自然散策を連動させた森の案内人（森林セラピスト・インタープリター等）の養成塾を開講する。

**◇木場公園の活性化**

・炭焼き窯の活用

木炭・竹炭の製造、木炭のお土産品の開発

・駆除害獣の加工食品づくり

シカ・イノシシの燻製・ジャーキーづくり

・野生動物の特産品の開発

シカ鍋・ぼたん鍋のほか特産料理の開発及び提供

・流木工房の設立

流木アートほか流木民芸品の開発

・石焼特産料理の開発

石焼バーベキュー（シカ・イノシシ肉も検討）・石焼しいたけなど炭で熱した石を用いた野趣たっぷりの料理の提供

**◇木場公園での常設施設の提案**

・「流木アート展」の開催と恒常展示

「奥香肌湖春まつり」で実践している流木イベントを一過性のイベントに終わらせずに、恒常的に木場公園展示をするとともに、木場公園での独立イベントとして定着させ、恒常野外展示とする。

・ウッドカヌーイベントの開催と工房の建設

「奥香肌湖春まつり」でカヌー（またはカヤック）体験とともに、木場公園内に地場木材を用いたウッドカヌー工房（香肌木工所）の設立を検討する。

**◇地域づくり組織の連携強化**

飯高地区（飯高町）は昭和３１年８月の合併当時の４村ごとに「地域づくり組織」を立ち上げ、松阪市内での活動ぶりは活発化している地域である。

森を考える会、宮前地区まちづくり協議会、波瀬むらづくり協議会、川俣地区住民協議会で飯高地域づくり連合会（仮称）を設立し、お互い情報交換しながら連携したイベント、地域づくりを行っていく検討は必要である。

**◇地域連携イベントの具体的方策**

・珍布峠（めずらしとうげ）ウォーキングコース

「奥香肌春まつり」と連動したイベントとする。

・歴史と自然の散策みち

「奥香肌湖春まつり」の開催にあわせて、旧飯高町内の４地区を結んだツーデーウォークを開催する。

・奥松阪の巨木・銘木めぐりツアー（自然観察コースづくり）

水屋の大クス、東漸寺のゴヨウマツ、福本の大トチノキ、黒滝神社の夫婦スギ、など集落内に散在し「巨木・銘木めぐり」をネイチャーガイドによって散策する。

**◇観光ガイド・語り部の養成**

・観光案内人養成塾の開設

地域コンシェル（地域シルバー世話人）を養成し、来訪者に対して懇切丁寧に地域の案内、定住化に向けた世話など細かにエスコートする。

・インタープリター（森の案内人）養成塾の開設

豊かな自然を愛する来訪者に対して、森を案内し体験させながら、自然の成り立ち、野生動植物などとの関わりを指導する。

・語り部養成塾の開設

単なる観光ガイドとは異なり、地域の歴史・伝説・民話など名調子で、来訪者に語り伝えていくエンターテイナーの養成をする。語り部は地域情報発信者として、各地のイベントに出張口演などをおこなう。

**◇飯高地区の年中行事のイベントの活用**

現代の人々は地域固有の年中行事に魅かれる傾向があり、年中行事を活用した観光交流を図ろうとする動きが顕著である。

イベントも年中行事と連動させて開催し、地域の伝統文化に触れてもらうことも必要である。

**最後に**

これからの時代はグローバル社会であり、日本人ばかりでなく、外国人もターゲットにする必要がある。外国人は、日本の田舎に大変興味を持っているので、田舎ツーリズム等を考えていく必要がある。まずは、日本在住の外国人をターゲットにした取り組みから出発すべきだ。

地域資源というのは沢山あるが、活用にあたって、あれもこれもと羅列したような取り組みはダメである。今の時代は「選択と集中の時代」で、活用資源をなるべく絞り込んで選び出し、選んだらそれに徹底して集中、つまり、こだわりをもった行動が必要である。

また、行政主導では地域は活性化しない。民間が主導的に動いてはじめて地域は活力を持ってくる。飯高地区では地域活動は活発化しているようだし、ぜひ、パワーを持続しながらの取り組みを期待したい。

地域イベントの活性化にしても、イベントだけを目的にしてはダメで、将来目標としての何かを達成したいがための一つの手段として使うべきである。それには、ぜひ４地区の皆さんの知恵を結集し、連携していく必要がある。

# 水源地域活性化対策
# 松阪市飯高町森地区活性化戦略
## ～イベント戦略を中心とした地域振興方策～

提言者
水源地域対策アドバイザー：二瓶　長記

## はじめに

「森を考える会」は昭和60年から地域活性化策の一環として、地域住民の結集によりダム湖周辺に桜の植樹を行ったり、ダム管理所と協働で「春祭り」を開催するなど、地域力の向上への挑戦を続けてきている。

しかし、イベントは地域活性化の起爆剤にはなるが、一過性的性格も併せ持つもので、継続的な効果を生み出すことは難しい側面をもつのも事実である。

また、森地区には近年のエコツアーブームに伴い、秘境的魅力を求めて訪れる人が増えてきている。

このような来訪者に対して、地域イベントが地域力向上のための効果的手法のひとつになれるか、さらに、地域イベントをコアにした観光交流による地域づくりをどのように推進していくか、といった観点から当該地区活性化の提言をするものである。

## 森地区の地域づくりの現状と課題
### 地域懇談会による抽出①
### ＜地域力の減退の理由＞

**・森林事業の落込みで元気喪失**

森地区は森林が主体の集落で、森林事業の落ち込みにより、かつての元気が失われてきている。

**・人工の急激な減少**

ダム建設を機にこの地を離れた人も多く、人口も急激に減少した。(昭和35年11，717人　平成17年5，002人)

**・地域崩壊への不安**

地域活力の低下や地域コミュニティ崩壊に対する将来不安

**・耕作地及び森林の荒廃**

将来を担う人材不足による耕作放棄地の増加と森林の荒廃

## 地域懇談会による抽出②
### ＜現在の活動実態1＞

**・住民主導による景観づくりへの取り組み**

地域住民主導での植栽による景観づくりに取り組んできており、成果も上がっている。

**・木場公園活用による元気づくり**

現在、整備中の木場公園活用による、元気づくりに取り組み中である。

**・炭焼き事業の表彰で誇り**

現在、実施中の流木活用による炭焼き事業については、平成17年に「花・　木・みどりの水源地域活性化大賞」を受賞しており、住民に誇りが生まれた。

**・地域づくりの弱体化**

森を考える会は地域づくりに取り組んでいるが、現実に働いている会員は限られた人数で元気度がパワーアップしていかない。

## ＜現在の活動実態2＞

**・獣害対策とその利活用**

昨今、鹿・イノシシ・サルなどの野生動物による被害が多発しており、駆除を実施しているが追い付かない。また、駆除した野生動物の食肉の利活用によるビジネス構築も検討中である。

**・流木の多様な利活用**

ダム湖の流木を活用した木工加工所の建設も検討中である。

**・人工池の有効な活用**

木場公園内の人工池を地域住民の力の結集によって完成させたが、今後はその活用方法が課題である。

**・バーベキュー施設の建設**

現在の木場公園内にバーベキュー用の施設(屋根かけ簡易施設)を設置し、来訪者に対する食の提供を検討中である。

# 地域懇談会による抽出③
## ＜今後への期待＞

・地区分権の定着化
松阪市の掲げる、地区の自主的地域づくり事業の定着に対する行政支援の成果への期待

・地域ビジネスの創生に望み
高齢社会（高齢化率39．0％）が進展しているが、こうした中でも、経済活動の一環として、自然・歴史・文化を生かした地域ビジネスが生まれることを期待したい。

・アドバイザー事業への期待
今回のアドバイザー事業を通して、観光交流の在り方、過疎化の著しい地域も元気になる方策を見つけたい。

# 森地区振興の基本的方向性

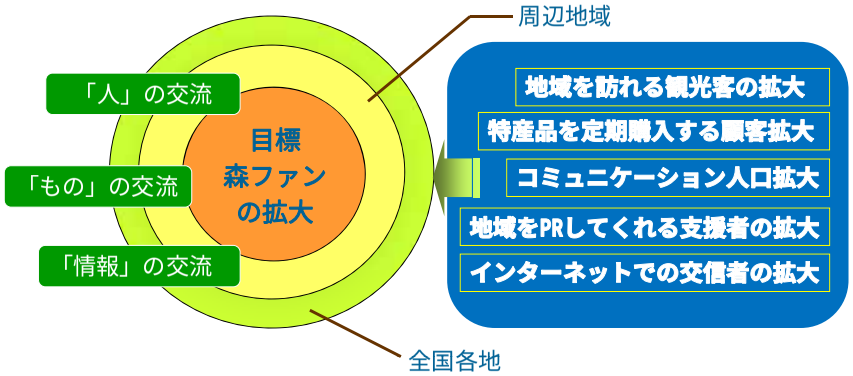
●観光交流人口の拡大化
上下流交流を含む観光交流人口の拡大への取り組み

●地域力の向上
地域住民の連帯意識の強化による地域力の向上

●持続的経済活動
持続可能な施策による雇用を伴った経済活動の推進

# 森地区サポート人口の拡大

都市住民との観光交流を通じて、森地区のもつ「光」を全国に向けて発信していく必要がある。




# 地域イベント戦略
## イベントを成功に導くポイント
①

**参加性**　参加してよかった
試してみてよかった

**教養性**　少し利口になった
自分づくり役に立った

**発見性**　新しい発見があった
地域認識がかわった

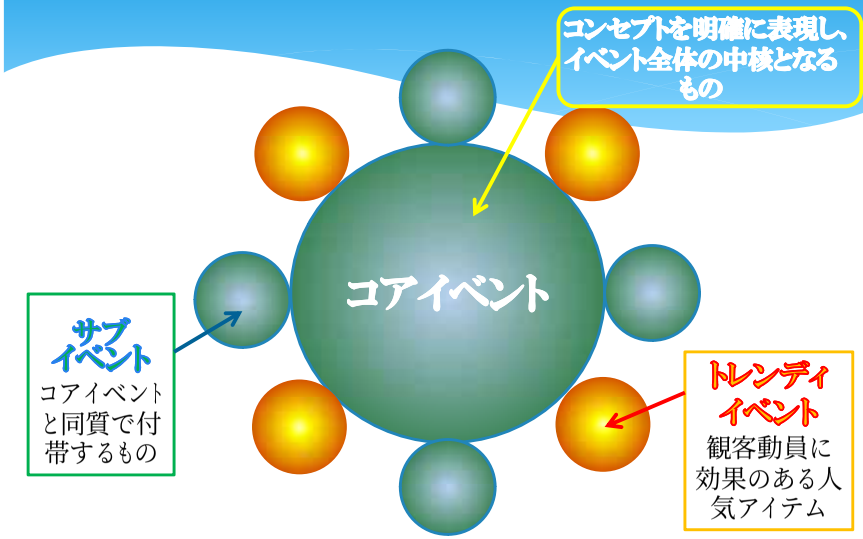
## 地域イベントを成功に導くポイント ②

**娯楽性**　本当に楽しかった 時間が瞬く間に過ぎた

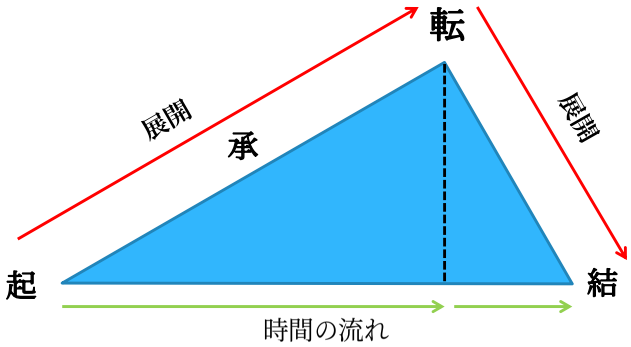
**共感性**　胸にじ～んときた 感動に涙がこぼれた

**連帯性**　みんなの力が結集した 仲間がたくさんできた

## 地域イベントの構成



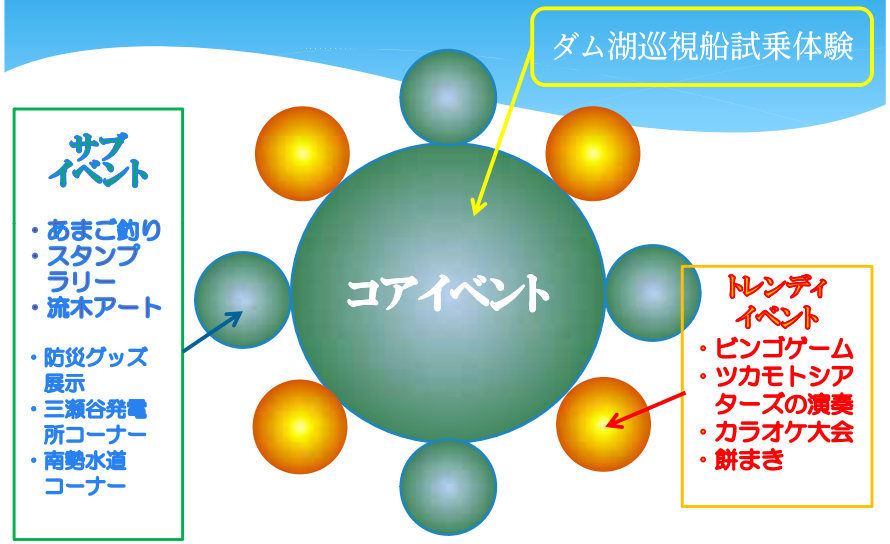

## イベント展開における起承転結




## 第11回「奥香肌湖春まつり」の概要

* ○日時：21年4月15日　10：00～15：00
* ○場所：蓮ダム・奥香肌湖「津本公園」
* ○主催：奥香肌湖春まつり実行委員会
*　　蓮ダム管理所
*　　森を考える会
* ○協賛：企業庁三瀬谷発電所・企業庁南勢水道
*　　ホテルスメール・飯高駅
* ○後援：松阪市
* ○参加者：800人

# 既存イベントの分類




# 「奥香肌春まつり」の改革

## ～現状と課題～

・春のイベント「第12回　奥香肌湖春まつり」では、ダム巡視船を利用した体験乗船に人気がある。

・今年度、イベント会場である津本公園にヘリポートが完成し、イベント時にはアトラクションステージとして利用が可能である。

・かつて、ダム湖面を走る水上バイク等の試乗も行ったが、現在は諸事情から中止している。

・今後、アバ（ごみ除けの**生簀）で魚を放流し、希望者には**魚釣りをさせたいと考えている。

## ～イベント改革の方向性①～

**○既存イベントの位置づけの明確化**

既存のイベント内容の位置づけ（コアイベント・サブイベント・トレンディイベント）を明確化し、特にコアイベントの演出趣向と発信の強化に努める。

**○起承転結のストーリー化**

全体構成の展開の流れを重視するとともに、イベント成功のポイントに留意すること。

**○魅力ある暮らし（食文化）の提案**

石焼しいたけ・石焼バーベキュー（鹿肉・イノシシ肉）などの提供
竹の利活用として「竹飯」（アマゴ入り炊込ご飯）と竹の器での提供

**○農林産物無人販売所巡りツアー**

イベント会場を出発・終着点として森地区内の農林産物無人販売所巡りをスタンプラリーと連動して実施

## イベント改革の方向性②

**○山野草摘み草ツアー**

豊かな自然を生かして摘み草ウォーキングと山野草料理を食べる（イベントとの連動で実証実験し、将来における定着化への布石とする。

**○山野草食い処の開設**

ヘルスツーリズムの時代に対応し、地元老人会とのタイアップによる摘み草の食事処の開設を視野に入れた食体験を設ける。

**○マタギ料理の開発**

獣害となっている鹿、イノシシの食活用によるマタギ料理を開発し、提供する。併せて、マタギ料理クッキングセットの販売も検討する。（クッキング詳細については別途検討）

## イベント改革の方向性③

**○ウッドカヌーの試乗会**

森林とともに生きてきた森地区の特性と、ダム湖という二つの特性を最大限生かしたレジャー産業にウッドカヌーがあげられるが、そのウッドカヌーを香肌湖に浮かべ、試乗会を開く。これは、将来、森地区に木材利用のカヌー工房の設立を視野に入れた新たな展開としても注目を浴びよう。

**○4地区連携ウォーキングイベントの開催**

森地区を中心に、川俣地区、宮前地区、波瀬地区との連帯感を醸成するために、各地区の地域特性を生かしたウォーキングイベントを開催する。

**○森の案内人（自然体験指導者）の養成**

自然散策を連動させた森の案内人（森林セラピスト・インタープリター等）の養成塾を開講する。

# 木場公園の活性化

## ～現状と課題～

**・木工加工所の建設**

ダム湖の流木を活用した木工加工所の建設等も懸案である。

**・人工池の活用**

木場公園内に作られた人工池を体験型池としての活用が課題である。

**・流木炭焼きの発展的商品の開発**

現在、流木炭焼きが行われているが、木炭の製造を発展させた木炭活用の新たな生活提案など、発展的な活用方策が求められている。

**・簡易バーベキュー施設の建設**

経済活動の定着化を図る意味でも公園内の一角に野外バーベキュー施設の建設（簡易施設）を検討中である。

**・オートキャンプ場の整備**

公園敷地内の一角にファミリー向けのオートキャンプ場を設け、自然体験の憩いの場づくりを検討中である。

**・観光交流の拠点づくり**

木場公園は森地区の観光交流の拠点づくりとしての位置づけのもとに取り組みを図る必要がある。

# 木場公園の活性化
## ～具体的方策～

**○炭焼き窯の活用**
木炭･竹炭の製造、木炭の土産品の開発

**○駆除野獣の加工食品づくり**
鹿･イノシシの燻製･ジャーキーづくり
（炭焼き窯の傍らに燻製製造所を建設し、特産品製造販売）

**○野生動物の特産料理の開発**
鹿鍋･ぼたん鍋のほかの特産料理の開発及び提供

**○流木工房の設立**
流木アートほか流木民芸品の開発

**○石焼特産料理の開発**
石焼バーベキュー（鹿･イノシシ肉も検討）･石焼しいたけなど炭で熱した石を用いた野趣たっぷりの料理の提供

# 木場公園での常設施設提案

**○「流木アート展」の開催と恒常展示**

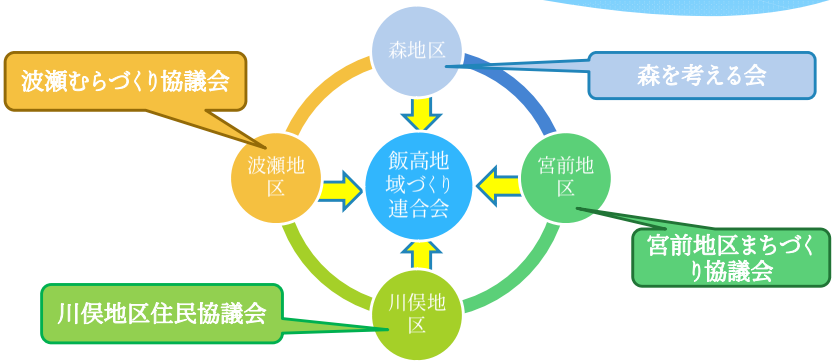
「奥香肌湖春祭り」で実践している流木イベントを一過性のイベントに終わらせずに、恒常的に木場公園展示をするとともに、木場公園での独立イベントとして定着させ、恒常野外展示とする。

**○ウッドカヌーイベントの開催と工房の建設**

「奥香肌湖春祭り」でのカヌー（またはカヤック）体験とともに、木場公園内に地場木材を用いたウッドカヌー工房（香肌木工所）の設立を検討する。

# 地域づくり組織の連携強化

飯高地区（旧飯高町）は、昭和31年8月の合併当時の4村ごとに「地域づくり組織」を立ち上げ、松阪市内での活動ぶりは活発化している地域である。



# 地域連携イベントの具体的方策

## ■珍布峠（めずらし峠）ウォーキングコース

道の駅「飯高駅」を拠点に全長7．5kmのウォーキングコースの旧和歌山街道（伊勢参宮、熊野詣、吉野詣及び紀州の殿様の参勤交代でにぎわう）。

紀州と伊勢を結ぶ街道で、街道筋には幾多の伝説が残っている。

※「奥香肌湖春祭り」と連動させたイベントとする。

## ■歴史と自然の散歩みち

「飯高166ツーデーウォーク」の開催

（着地型旅行企画）

「奥香肌湖春まつり」の開催に合わせて、旧飯高町内の4地区（宮前・川俣・波瀬・森）を結んだツーデーウォークを開催する。

＊（4地区協議会合同イベント）

※なお、当イベントは地域産品無人販売所めぐりとジョイントして展開する。

## 【参考コース案】

### 1日目

集合：飯高駅

●宮前地区：珍布峠（旧和歌山街道）のウォーキングコースの散策（観光ガイド同行）

●川俣地区：櫛田川流域に沿って、渓谷美や自然の豊かさ、野生動物（鹿、サル等）の動態観察をして歩く。

※到着：ホテルスメール（宿泊）
（他の宿泊施設も検討）

### 2日目

●波瀬地区：波瀬の街並み・植物園ほか（摘み草インストラクター同行）

イベント会場に到着：津本公園での「奥香肌湖春まつり」参加体験

●森地区：木場公園までの散策、炭焼き体験、バーベキュー食体験

解散：飯高駅（シャトルバスにて飯高駅まで移動）

※上記のコースは条件等により多様なコースづくりが可能である。

# ■奥松阪の巨木・銘木めぐりツアー
## （自然観察コースづくり）

●樹木のふるさとづくり
蓮ダム周辺に植生している桜、百日紅、なんじゃもんじゃ、モミ、つつじなどを植栽してきた森地区の人々の功績もあり、ダム周辺は豊かな樹木のふるさとになる可能性をもっている。

●ネーチャーガイドによる散策
県指定天然記念物の水屋の大クス、町指定天然記念物の東漸寺のゴヨウマツ、福本の大トチノキ、黒瀧神社の夫婦スギ、旧川俣小学校跡街道松など集落内に散在し、「巨木・銘木めぐり」をネーチャーガイドによって散策する。

# 観光ガイド・語り部の養成

●観光案内人養成塾の開設
地域コンシェルジュ（地域シルバー世話人）を養成し、来訪者に対して懇切丁寧に地域の案内、定住化に向けた世話など細かにエスコートする。

●インタープリター（森の案内人）養成塾の開設
豊かな自然を愛する来訪者に対して、森を案内し体験させながら、自然の成り立ち、野生動植物などとの関わりを指導する。

●語り部養成塾の開設
単なる観光ガイドとは異なり、地域の歴史・伝説・民話など名調子で、来訪者に語り伝えていくエンターテイナーの養成をする。語り部は、地域情報発信者として、各地のイベントに出張口演などを行う。

地域内を案内する

観光ガイド養成風景

ツアー参加者はレトロに興味

紙芝居を使用の養成

# 宿泊可能な施設

※宿泊施設については、次の箇所があり、活用可能である。

●グリーンライフ「山林舎」（波瀬）
●ふるさとの家「月出の里」（月出）
●つつじの里「荒滝」（赤桶）

施設活用を優先する場合には、上記以外の多様なコースの設定が考えられる。

# 飯高地区の年中行事のイベント活用

・現代の人々は地域固有の年中行事に魅かれる傾向があり、昨今では、年中行事を活用した観光交流を図ろうとする動きが顕著

・イベントも年中行事と連動させて開催し、地域の伝統文化に触れてもらうことも必要

## 1月

**3日：「ごきげん、ごきげん」行事**

地元に伝わる獅子頭と天狗の面をなでると無病息災、五穀豊穣が叶う。

7日：「七草粥」（無病息災を祈願する一連の行事）

「七草粥」を食べる

**マタギ体験ツアー**

七草粥・森の昔語り・どんど焼き、ぼたん鍋など体験する田舎ならではの冬のイベントの実施

15日：「どんど火」（どんど焼き）

## 2月

3日：「節分」

戸口にイワシの頭とヒイラギの枝を挿し、豆まきをする。

## 3月

3日：「ひな祭り」

波瀬地区では「ねこもさん」（猫も三文、おれも三文）と唱え、ごちそうをいただく。

## 4月

8日：「花祭り」

つつじの花を家の前に飾る。「花より団子」と称して、団子を食べる風習があった。

春の恒例イベント

**奥香肌湖春まつり**

と連動して、地域の伝統行事の「花祭り」を組み込み、つつじの花の飾りと団子を食べる風習の再現

## 5月

5日：「端午の節句」

しょうぶ、ちまき、柏餅などで男子の成長を祝う。

## 6月

1日：「農上がり」

「でんがら」という朴の葉でつつんだ団子を作って食べる風習がある。

## 7月

1日（旧暦）：「浅間さん」

水ごりで清めた人が御幣をつくり、浅間神社に登って、なす、カボチャ、酒、焚き木をもって夜ごもりをする。

31日：「お水取り」

地元では「水屋祭り」と称し、近郷からの参拝客も多い

## 8月

**15日:「盆踊り」**

4地区ごとに特徴があり、独特の祭文と踊りが特色

20日前後:「夏祭り」(恒例の夏祭り大会)

## 9月

23日:「彼岸」

墓参りと餅やおはぎをつくり1日ゆっくり休む。
寺に集まり住職の話を聞く集落もある。

## 10月

吉日:「まきあげ」

今年採れた里芋の芋餅を
創って食べる風習がある。
黒滝神社では「天神さん」の祭りもある。

**飯高・田舎体験ツアー**

森地区の暮らしや風習をベースに体験型(薪割り・炭焼き・「まきあげ」行事の芋餅づくり等)の1泊2日のツアーを実施する。

## 11月

8日:「庚申祀り」

おはぎ、餅をつくり庚申に祀る風習

「夷講」

赤飯、そば、魚、大根、柿などを夷さまにそなえる

## 12月

7日:「山の神」

山に入ることを禁じ、山に感謝して餅まき、会食をする行事で、集落によっては「どんど火」を焚く

○　意見交換等について

**森を考える会会長**：　地域づくりはリーダーが必要で、それを地域が選んでやっていく。計画を持った中で、地域を行政が後押しをしないとうまく進まないということを先生の著書で読ませていただいた。振り返って考えてみると、今まで進めてきた中で自分たちがこういうことをしたんだということで旧飯高町の当時から町、ダム管理所の支援をいただいてきた。自分たちとしても、この地域にあるダム湖がいつまでも人々から親しまれたいとの願いもあり景観づくりから始めた。今後も自分たちはそういうことを実行したいということをお願いし、行政側の手助けを続けてほしいと願うところです。当初の木場公園の計画では、野草を試食したりする管理棟的なものとか、木工加工して置物をつくる施設を考えていたが、行政側の話も聞くと厳しい時代だということで思うにまかせない。その辺の支援がいただけるような方向付けが出来たら本当に関わって良かったという思いになるので、その辺のところお汲みとりいただき良い方法があればアドバイスをお願いしたいと思っている。

**アドバイザー**：　行政との関わりは重要だと思う。私が指導しているある自治体では、アイデア事業の公募を行っており、ここでは住民から事業提案されたものを公開審査し、採択された事業に行政が支援するというやり方である。そうすると住民にやる気が出てくる。行政主導だけでもダメ、住民だけでもダメ、住民と行政がどうやってパートナーシップを組みながらやっていくかということが、これからの大きな課題だろうと思う。行政に何かしてくださいとお願いするのではなくて、住民が自主的に取り組める具体的な事業計画を提出し、それに対して、行政がどの程度支援できるかを検討する形が一番理想的と思う。

**地域振興課長**：　地域の方にやっていただいて、そういう行動の中で最終的に実績が伴ったら支援するという形になる。

**アドバイザー**：　どの自治体でも金が無い話ばかり。まず、お金をかけなくても自主的に出来るようなところから取り組む。実績を踏まえて、これだけかかるということを行政にぶつけていくという形が一番理想的と思う。そうすることで少しずつ先へ進んでいくということになる。なるべくスピードアップしていただけるということも含めて、そういうスタンスで取り組んでいけば出来ると思う。

**森を考える会会長**：　私たちの会も活性化事業をみんなの意見を聞きながら進めてきた。若かった者も１０年経てば年も取り、若い人に引き継いでいかなければと常々思っている。ここまでやってきたので見通しが出来ました。これからも挫折せずにこれだけは進めていこうという意気込みです。

**アドバイザー**：　地域を視察させていただき、景観作りに頑張っているという姿をひしひしと感じた。こういう地域であればいろんなことへの挑戦が可能と感じた。皆さん方が結束して行動すれば必ず実を結ぶと思うので、頑張ってもらえればと思う。手始めに今年のイベントは、今までと違うぞというふうに一つだけでも持っていってもらうと、少しずつ先に進んでいくような気がする。何度も言うが、イベントはイベントだけを目的にしてはダメで、イベントは何かを達成したいがための一つの手段として使っていくということを心得ていてほしいと思う。そのためにも、達成したいものは何なのかを皆でもう一度考えてほしい。それと４地区の連携はポイントだと思うので、是非検討していただければと思う。

**川俣地区住民協議会会長**：　４地区が色んなことで連携をとっていくということが大切なことと思っている。

**宮前地区まちづくり協議会会長**：　公民館長を中心に歴史街道の研究を始めようと考えている。研究の中で整理された資料は、歴史街道の案内にも役立つと思うので案内人の養成に繋げていきたいと思っている。私どもの地域は飯高駅が一つの拠点であり、その前を通っている川が香肌峡という県立公園になっている。都市部の人に理解していただけるよう川筋に遊歩道の整備をし、珍布峠のコースに組み込めないかということも考えている。

**アドバイザー**：　先ほど語り部の話があったが、徳島県の小松島市では数年前に語り部協会を作った。小松島はタヌキの伝説で有名なところであるが、その伝説を事細かに語れる人がいない。タヌキの伝説があることは知っているが実際語って聞かすことが出来ない。そうこうしているうちに、明治初期に出版されたタヌキの講談本が国会図書館で発見された。そこで、講談本をベースに語り部用の台本に書き直し、喋り方教室を開設し、指導者として東京の講談師に毎月１回来てもらった。１年後にはプロ顔負けの素晴らしい語り部が出来あがった。１ヶ月１回でも１年やればそれなりのものになります。参加者は生き甲斐すら見いだせるだけに、こちらでも頑張って挑戦してみたらどうでしょうか。

## ５．今後の方向性、取り組み

今回、アドバイザーの提言を受けて、イベントは地域活性化の起爆剤となるが一過性の性格があり継続的な効果を生み出すことの難しさはあるものの、既存の地域イベントを切り口に、更にイベントの構成、展開の仕方、改革の実行により地域活性化、地域力の向上及び地域ビジネスに繋げていけるよう住民と行政がパートナーシップを組みながら取り組んでいきたいと考えている。地域伝統を感じさせる或いは手作りで地元の本物の特産品で、飯高の地を訪れた証になるような土産物の開発、また春まつり、夏まつりは集客力のあるイベントであることから、このイベントで地域食材、薬草等を活用した郷土の味覚・料理等の実証実験に取り組みたいと考えている。

アドバイザーからの提言は多岐に亘っており全部を一度に取り組むのではなく、選択と集中して出来るものから一つ一つ積み重ね、具体な事業計画に対して行政としてどのような支援が出来るかを実施団体である「森を考える会」等と協働しながら取り組むとともに、飯高地域に設立されているまちづくり団体相互の情報交換、連携したイベント企画等、特に観光客は地域情報の解説や案内人を求めていることから語り部、森の案内人等を養成し、その求めに応えられるよう取り組んでいきたいと考えている。